

HIMALAYA

ヒマラヤ
No.356



2001 JULY



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

2002年H A J 登山隊隊員募集

八千メートル峰 シシャパンマに新ルートを求めて

ヒマラヤの八千メートル峰に新ルートを開拓する余地はないか。このテーマ（夢）を追い求めて過去岳人達は様々な努力をしてきた。

1990年代に入り日本隊では、90年チョゴリ北西壁下部（横浜）、95年マカルー東稜下部（JAC）、97年K2西壁上部（JAC東海）など部分的な開拓が行われ、94年山野井泰史が単独でチョー・オユー南西壁に新ルートを開拓した。

現在シシャパンマ峰は、主峰の標高を8,027mとした場合、中央峰の標高が8,008mとなる。このため中国隊が初登頂した北面から中央峰北東稜を登りそのまま中央部に登頂しているケースがほとんどとなっている。初登頂した中国隊は中央峰北東稜から大雪面をトラバースして主峰に登頂している。日本隊では81年女子隊、88年H A J隊、99年群馬隊は、この大トラバースを行い主峰に登頂した。他隊は何故トラバースして主峰に登頂しないのか。それは「雪崩」の危険を避けるためだ

ろうと推測される。しかし、中央峰を登った岳人たちはそこが「8,000m」の標高を与えられているからなのだが、ヒマラヤの標高は不動ではない。中央峰の標高が8,000mを切ることも有りえない訳ではないだろう。

シシャパンマ主峰に新ルートは考えられないのか。常々疑問に思っていた。技術的な困難な南西壁では通常ルートにはなり得ない。可能ならば通常ルートとなり得るようなレベルの新ルートをトライしたいと考えています。意欲ある岳人の参加を期待します。

記

1. 時期 2002年秋 50～60日間程度
2. 募集人員 10名程度
3. 負担金 100万円
4. 申し込み、問い合わせ H A J事務局

表紙写真

【チュルーC1付近から遠望するアンナブルナI峰北面】1989年の立川女子高隊の幻の「南東峰初登頂」や、ネパール側の呼称にオコナーの著書が合わせてないなど、チュルー一帯は物議をかもしてきた山群である。当時筆者はこの山々を見たこともなかったが、行きがかり上これら諸問題について「岩と雪」147号誌上で解明に当たった。今回、この山群最高峰に日本隊として初めて登れたのもこの因縁がもたらしたものかも知れない。（近藤和美）

ヒマラヤ No.356

- | | |
|--|----------|
| 1. チュルー・イースト日本隊初登頂 | 近藤 和美 |
| 7. カラコルム・ヒマラヤのきのこを訪ねて | 井上/吹春/本郷 |
| 14. 2002年H A Jサマー・キャンプ隊員募集 | |
| 15. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・ヒマラヤから・Books〉 | |
| 17. 第22回インド・ヒマラヤ会議報告 | |
| 21. ニンチン・カンサ(7,206m)登山計画 | |
| 24. 事務局日誌 | |

トレッキング
ピーク最高峰

チュルー・イースト日本隊初登頂

日本勤労者山岳連盟高所登山学校隊2000

近藤 和美

はじめに

海外高峰登山への参加を求める会員への機会提供とこの分野での人材育成を狙いとして、1988年に開講を始めた日本勤労者山岳連盟実践高所登山学校は昨2000年春に20回目を迎えた。受講者は延べ148人にのぼり、もとより1回参加しただけで一人前の高峰登山家になれるような簡単なものではないが、中には自ら7000m峰、8000m峰の登山隊長を務めるようになったり、所属地方連盟で海外登山活動の推進役になるなど、有為の人材も少なからず育った。しかし近年はどちらかというところツアー登山気分で参加してくる受講者が多くなる傾向があり、機会提供という面ではそれも目的に合致していないわけではないものの、主催者側としては若干物足りない思いも抱いているのが現状ではある。

ともあれ20回目の開講地はネパール・ヒマラヤ、ダモダール山群のチュルー・イースト(6584m)に定めた。1978年に制定された簡易許可で登れる、いわゆるトレッキング・ピーク18座中の最高峰でもあり、これまで少なくない日本隊が登頂を目指している。しかし、この山はトレッキング・ピークにしてはルートが非常に長いので、登山日数にもそれだけのものを要するにもかかわらず、トレッキング・ピークだからという先入観からか、それだけの備えをしない隊が多く、筆者が知り得る限りではそのすべての隊が登頂できぬままに終わっていた。

実は労山高所登山学校自身も以前1度、98年の暮れから翌年1月にかけてこの山で開講した。日数がかかるということは承知していたので登山日数は10日間を用意して行っただが、活動終盤に冬の寒波が襲来した結果、過去にイーストを目指した各隊同様、同峰登頂はあきらめて、手前のチュ

ルー・ウェスト(6419m)登頂にとどまった。そして、そのとき隊長を務めた近藤にも、また受講者として参加していた久保、中村にとってもイーストはやり残した宿題として心に引っかかり、出来るだけ近い将来に雪辱を果たしたい山となっていた。そして1年半後、高所登山学校は改めてこの山での開講を決定。しかし、年度切り替え直後に当たり、夏や年末年始と比べると長い休みが取りにくい時期だということもあって、受講者は前記2人に大神田を加えた3人だけにとどまった。いずれも無職の高齢者である。なお、中村隊員は聾啞者であり、安全確保面の充実のため、小規模隊としてはやや贅沢な2人目の講師として永田を迎えた。役割分担は永田には主に高所ポーターらと共にルート工作隊として活動してもらい、近藤は受講者と共に後行グループとして行動する計画であった。また、登山期間も15日間を確保した。

さらに、この山の地理的關係から入山前、下山後のキャラバンルートは、トレッカーに憧れのアンナプルナ1周をするのに無理のないコースともなるので、そのトレッキングを楽しむことも目的に加えた。

■隊長：近藤和美(58)

講師：永田幸一(42)

隊員：大神田伊曾美(56)

久保輝昭(60)

中村洋一(61)

行動概要

4月9日、先発として近藤と大神田がカトマンズ入りし、準備活動に入る。13日、カトマンズ入りした後発3人を迎え、翌日チャーター・バスでベシサハールへ移動する。

15日、マルジャンディ川沿いのキャラバン開始。ヌガディ、ジャガット、グラパニ、チャームと

▼小雪原上のC 1（前方はウェスト）



キャンプを重ね、19日にフムデに着く。近藤は日本出発前の激務の影響で蓄積していた疲労からキャラバン中に風邪を引き、チャームでは嘔吐するなど相当な不調を呈し、だましだましの行動であった。

20日、チュルー・イーストのBCに入る前にその高度の順応を獲得しておくべく、高所ポーターのガネッシュ・マガールやコックのティカ・グルンと共にチュルー南東峰BCまで往復する。なお、隊荷運搬のキャラバン隊はサダーのラハール・タマンの統率のもと、マナンへ先行する。彼はチュルー・イーストは初めてなので、近藤の前の経験に基づいてルート工作について指示して送り出した。

21日、キャラバンを続開し、マナンへ。また、隊荷はBCに到着する。

22日、今日中にBC入りする予定でマナンを出発。チューリラッタルでマナン〜トロン峠街道と別れてBCに向かう。チューリラッタルとレダーの両ロッジの間の水量の少ない小沢の出合から、初め小沢右岸側の草付き斜面の放牧道をたどり、途中からトラバースして小沢に戻ってくる。この辺りすでに水が涸れている。後はこの沢伝いに上部へたどると源頭はアブレーション・バレー地形となり、やがて草地在が広がり巨岩が点在するBC(4780m)に到着する。登ってきたほうを振り返るとアンナプルナ山群のグランド・バリエール(大障壁)越しにアンナプルナ1峰(8091m)が望まれる。

この時期は雪解け水が使えるかと思っていたが、予想以上に残雪が少なく水は得られず、キッチン・ボーイがサイド・モレーンを越えてチュルー・

ウェスト西面氷河まで水汲みに往復した。BCまでレダーから3時間程度だが、今回はマナンから1日で入ってしまったのでややきつい行程となった。

昨日BC入りしていたサダーはC1へのルート工作に取りかかっていたが、翌日からはガネッシュも加わって連日ルート工作とC1への荷揚げに従事してくれた。

1日を休養に充てた後、24日、私以下の日本隊員もC1往復に出発。私の体調もどうやら本来の調子に戻りつつあるようだ。前夜は降雪があり、BCはうっすらと雪化粧したが、日が当たると共に急速に解けてなくなった。

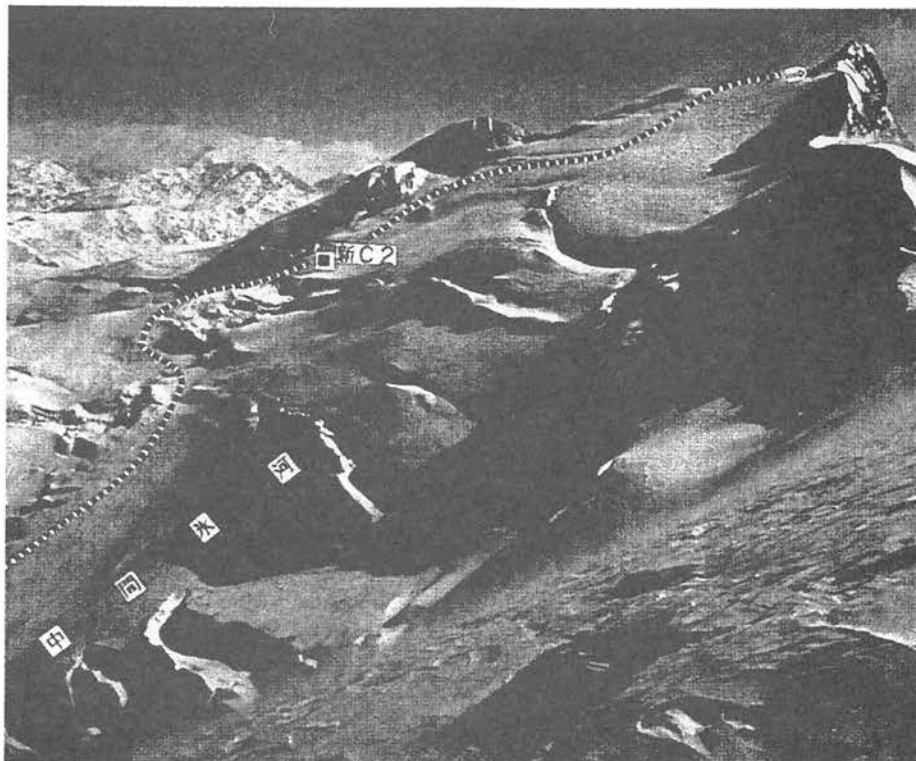
BCから右岸尾根上の顕著なコル目指してガレ場の中の踏み跡を登る。コルに出るとそこは支尾根上のコルで、裏側をトラバースすると本当のコルに出る。再びガレ場を登るとまろい岩稜が始まり、ここから固定ロープが設置されていた。途中2カ所ほど級程度の箇所もあり、そこはもちろん、全般に下降のためにも固定ロープは設置したほうが無難である。最上部2ピッチほどは氷雪壁になり、抜け出るとスノー・ドーム上に飛び出す。広い雪尾根をわずかたどると小雪原状の格好のC1地(5540m)に着く。

25日、隊員は再度C1に上がって宿泊。眼前には懸垂氷河を抱いた西壁を正面にしたチュルー・ウェストが迫力十分に望まれる。

26日、隊員はC2高度の順応を目指して出発。一方、昨日までC1への荷揚げに往復してくれていた高所ポーターには今日はBCで休養してもらう。C1から右へカーブする水平に近い雪稜をたどると雪壁となり、これを登りつめると、今度は左へカーブする水平な雪稜となる。この辺りまで登ってくるとアンナプルナ山群はもちろんダウラギリ1峰(8167m)も視界に入ってくる。

稜の左側は氷河までの高度差が小さいが、右手はBCを置いた谷まで高度差も大きく急峻に切れ落ちている。ラッセルがやや深く、ヒドン・クレバスもありそうなので永田トップでアンザイレンして前進する。雪稜をしばしたどると左手のチュルー連峰北東面のチュチェ・コーラ源頭氷河との高度差が徐々に小さくなり、やがて氷河にそのま

チュルー・ウェスト北稜から望むイースト



▼ウェスト北稜上のC 2



まっつながる広大な雪原の南西端の一角に出る。ここは後にC 1を移動して新C 1を置いた場所である。

3隊員は大体この辺りで高度の影響が出たり、体力が限界に近づいたりしたので引き返すことになり、中村には大神田が付き添ってBCに下ってもらう。

近藤と永田はイースト登頂の鍵となるC 2地点確定とそこまでのルート選定のため、なおも前進する。C 2まで行けば未だ姿を見せぬイーストの全容が望め、初めてこの山にきた高所ポーターたちにも頂上までのルート採りについて彼ら自身の目で得心させられるからだ。雪原を横切り、チュルー・ウェスト北稜の背の傾斜が落ちた辺りを目指してやや急な雪壁を登る。ラッセルが一段と深くなり、交互にトップを務めるが、地吹雪模様になってきたこともあってけっこう厳しい。

北稜の背は実際には幅広の雪壁で、ウェストに登頂する場合はこれを上部へたどればよい。ヒドン・クレバスが目立ち始めた北稜の背を向こうの端まで進み、ようやくイースト北東稜との中間氷河側へ落ち込み始めるC 2予定地(6050m)に到達する。前回もここにC 2を設けたが、イーストの姿自体も、キャラバン中に一時南壁側から仰がれるのを除けば、ここで初めて目にすることができる。明日BCから直接上がってくる予定の高所ポーターにここが分かるように標識旗を立てた上で下山にかかる。BCに戻り、前回ウェスト北稜上部からイーストを撮った写真を基に、ルート採りについて高所ポーターに指示を与える。

27日、隊員は休養。高所ポーター2人はBCか

ら直接C 2に上がる。

28日、高所ポーターはC 2を足場に、その先のルート工作に従事。日本側は今日も休養。当初の計画では永田は高所ポーターらと共にルート工作の先頭で活動したいという意向があったのだが、初めから高度順応ができていて体力もある彼らとの同一行動はなかなか難しく、ズレが生じてしまった。

29日、受講者3人はまだC 1とC 2の中間点までしか順応していないので、改めてC 2高度順応目指してBCを発つが、永田は風邪気味で微熱があるということでBCに停滞となる。近藤と3隊員はC 1へ。一方、高所ポーターはC 3地点までルートの目途を付けた後、BCに下る。

30日、昨夜少し雪が降ったが、朝には快晴になり、C 1の4人もC 2往復後BCへ。

頂上アタック作戦についてサードらと協議する。もし実際にC 3まで作るとなると日数がかかり過ぎるし、キャンプ間隔も短過ぎて不経済なので、アタック時にはC 1、C 2をそれぞれ移動して所要日数を1日短めようと提案する。これは高所ポーターらの負担が増すことにつながるが、彼らは「グッド・アイディアだ」と快諾してくれた。

5月2日、復調した永田を含めた日本側5人と高所ポーター2人、それにコックのティカの計8人でアタックに出発。ティカは料理も上手いが、抜群の高所適性を持っていて、これまで多くの6000m峰登頂の経験があり、チョモランマでは7000mを超えるノース・コルまで荷下げに上がってくれたこともある。私は「クライミング・コック」と呼んでいるが、1人2役を務められる得がたい人材である。

C 1が上がった後、これを撤収して上部雪原にキャンプを移設(新C 1=5750m)し、宿泊。

3日、C 2に上がり、撤収してさらに上部を目指す。といってもイーストへはここからいったんイースト北東稜との中間氷河まで下り込まねばならない。まず氷河の底までつながっている雪壁を高度差で約200m、固定ロープで5ピッチを下り込むが、ここはルートを選ばないと懸垂氷河や岩壁の上に出てしまって阻まれる。上から見下ろした

だけでは側壁の全容がうかがい知れないので高所ポーターたちも若干試行錯誤させられたと言っていたが、最適なルートが見い出されていた。

氷河に下り切った辺りは平坦に近い大きなクレバスが多数走っている。なお、新C1から雪原を緩やかに下ってウェスト北稜の末端を回り込んで中間氷河をここまで登って来る方法もあるが、登り下りの標高差に大差はなさそうで、所要時間はおそらく余計にかかるものと思われる。

中間氷河を対岸へ、イースト北東稜側面基部側に移るが、この辺りで中村の足取りが怪しくなる。彼は前回もその日の行動時間が一定限度を超えるか、6000m近い高度まで上がると不調に陥っていたが、今回もこれまで同様の傾向を示していたので、用意してきていた酸素を吸ってもらうことにする。

徐々に傾斜を強める氷河をつめるがヒドン・クレバスもあるのでアンザイレンは欠かせない。結構ラッセルがあり、重荷を背負って先行する高所ポーターたちは重労働だがよくがんばってくれている。

上部アイス・フォール帯にさしかかった所から左上してイースト北東稜の背を目指すが、巨大なクレバスが開いており、高所ポーターによって固定ロープが設置されていた。クレバス帯を通過して右へ回り込むとしばしで雪原状に広がった北東稜の背に出、ここに新C2(6220m)を設営する。北東稜とはいっても、この辺りではもはや右手に広がる中間氷河との高度差はほとんどなくなっている。

4日、ありがたいことに4月30日以来の快晴が続いている。日の出直前に新C2を出発。ネパール・スタッフ3人はたちまち先行して、距離を離して行く。日本側5人も中間氷河の一部と化した雪原状の斜面を永田トップでアンザイレンして後を追う。傾斜は緩いが、高度が上がり、ゆっくり登っていたつもりだったが、久保にはかなり辛かったようだ。途中で、今のペースでは付いていけない、と自分の判断でアンザイレンから離れてしまう。ヒドン・クレバスだらけのこの斜面の中を1人遅れて登って来ようなんて自殺行為だと叱り、ロープに戻させるとともにベースを一段と落とす。

▼C2からのイーストと中間氷河



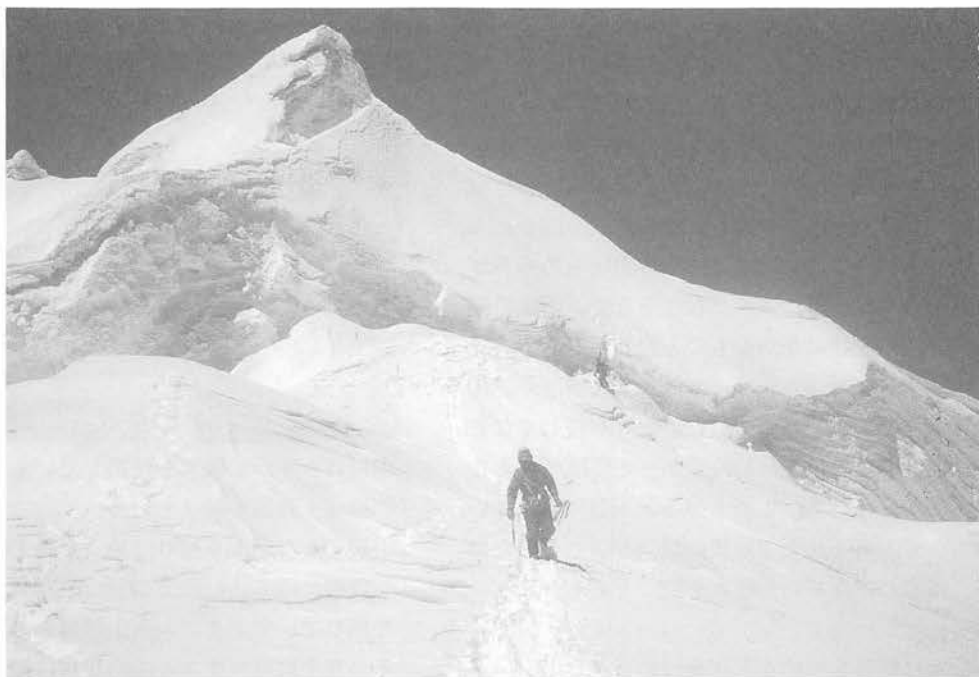
中村はさすがに酸素を使用しているだけあって、問題なく登高を続けている。

緩やかな斜面を登りつめると最上部でマナン側へ急峻に落ち込む雪原の端に飛び出し、突然といった感じで、アンナブルナ山群はもちろんのこと、その左手にはマナスル山群が目に見え込んでくる。あまり端に寄り過ぎて雪庇を踏み抜かないように気をつけつつ、地形なりに右へたどるとイースト頂上ピナクル基部に達するが、そこにはサーダーたちが待ちくたびれた格好で待っていた。

基部には巨大なベルク・シュルントが走っており、そこを越えて上部雪壁へとすでに1ピッチ固定ロープが張られていた。改めてルート工作に先行するサーダーらに続いて我々も最後のアタックに向かう。荷を少しでも軽くしようとユマールもエイト環も置いてきてしまったという久保に私の物を貸し与える。私はそれらなしでも登り下りできそうだ。

ベルク・シュルント上側のオーバーハングを乗り越えて急な雪壁を登ると頂上最上部を形成する黒ずんだ垂直に近い氷壁の基部に出る。ここから2ピッチ目のロープを張る。ルートは螺旋階段を登るように右側へ回り込み、最後はマナン側の高度差2000mの南壁を見下ろすように斜上して頂上に達する。

最高点は1人が立てる程度の狭さで、周囲はすべてすっぱりと切れ落ちている。私はその天辺に立ってみたが、あとの者は全員、頂きを手で触るにとどめた。それにしてもそことてせいぜい3人が並べる程度なので、交代で登り下りする。奇しくも大神田にとっては誕生日当日の登頂となった。



また中村は当初は酸素使用を嫌がっていたが効果はてきめんで、問題なく登頂でき、「使って良かった」というのが事後の感想である。すばらしい眺望を思う存分満喫した後、下山にかかる。

新C 2まで戻り、撤収後さらに下山続行。といっても中間氷河の底からからはまた旧C 2地点まで登り返さなければならない。疲労した体にはこたえる区間である。

この日、日本側は新C 1まで下って1夜を過ごしたが、高所ポーターらは腹いっぱいネパール食が食えるBCまで一気に下って行った。

5日、日本側はBCへ下り、入れ違いに再度上がってきた高所ポーターらは新C 1撤収とC 1下の固定ロープを撤収。長く続いた好天もついに崩れてきて、この日午後からかなりの悪天候となり、幸運を喜び合うが、これも高所キャンプ移設によってアタックを1日早められたことがもたらした結果でもある。

登山が首尾よく完了したので、予定より早く明後日に下山を開始することにし、ポーター手配にキッチン・ボーイを走らせる。

6日は下山に備えて梱包作業などを行ない、7日BCを撤収する。隊荷と共に往路を帰るサードラーとレダーで別れ、我々はエスコート役のティカ

と共にトロン峠越えの後半キャラバンに入る。今後はロッジ泊まりで行くことにし、この日はトロン・フェディに宿泊。翌日トロン峠を越えるがあいにくの天候で楽しみにしていたダウラギリ山群の展望は得られなかった。キンガー、トゥクチェ、ガーサと泊まり、タトパニでは2泊してたっぷり露天風呂を楽しむ。その後、チトレで泊まり、ゴラパニ峠からブン・ヒルを往復した後、タダパニに出て宿泊。15日にガンドルン経由でナヤプールに下り、タクシーでポカラに出た。なお、13～15日は連日、午後に夕立状の大雨が降ったが、寒冷前線通過を思わせる天候急変で、その前後は気温が急降下した。

16日、バスでカトマンズに帰着。翌日から残務整理と、近藤、永田は引き続き遠征するK 2／ブロード・ピーク登山に向けた準備活動に従事する。

20日夜、中村が関西空港直航便で出国し、翌日帰国。他の隊員は次の目的地に散る。



今回の我々の登頂は日本隊としては初めてではないかと思われるが、外国隊を含めても何度も登られてはいないだろうというのが、登ってみての感想である。

カラコルム・ヒマラヤのきのこを訪ねて

井上重治／吹春俊充／本郷次雄

はじめに

著者の一人、井上は1992年から1998年まで7回にわたってパキスタンの北方地域をトレッキングして、氷河や高山植物の観察をおこない、その結果をヒマラヤ誌に発表してきた。今回は、その一環としてきのこ観察をしたのでその一部を報告する。

インド大陸、特に北部のヒマラヤ地域は顕花植物の種類が豊富であることから、多彩な菌類(きのこ)が生息していると考えられる。植物生態学的には、北の中央アジア区系、西の地中海区系、それに東からヒマラヤ回廊として知られる細長く伸びた日華区系の植物が入り込んだ地域である。当然、パキスタン北部のきのこのフロアについて、三つの地域要素が入り混じっていると考えられるが、これに関する組織的な研究はまだ報告されていない。

パキスタンはきのこの豊富な国として知られている。パキスタンのきのこについて、アーマド(S. Ahmad)は183種を記載し、山梨県森林研究センターの柴田尚氏は57種、大分県きのこ研究指導センターの村上康明氏は76種の担子菌きのこを報告している。また、パキスタンの腹菌類に関しては、アーマドの報告に加えて、京都市教育委員会の吉見昭一氏らが17種の腹菌類きのこを記載している。また、著者の一人、本郷は1956年に本多勝一氏がヒンズークシュで採集した4種類のきのこを鑑定している。これらの報告によれば、パキスタン北部のきのこは、日本、ヨーロッパと共通したもの、日本、パキスタンにあってヨーロッパにないもの、ヨーロッパ、パキスタンにあって日本にないものに大別され、上述の三つの植物要素と組み合わせると興味深い。

カラコルムの乾燥した土壌を調べた明治製菓研究所の宮道慎二博士らの研究によれば、きのここと

同じ菌類であるカビのうち、世界的に広く分布するペニシリウム、トリコデルマ、ケカビなどが分離されず、アスペルギルスが優先的に存在すること、そのアスペルギルスの中でも、日本で非常によく分離される *Aspergillus* Sect. *Nigri* がまったく分離されないことを報告している。

1. パキスタン北部のきのこ

パキスタンの首都であるイスラマバードは、標高600メートルにある比較的新しい人工の街である。その一角のファイサル・モスク(サウジアラビアの寄付で建設された壮大な寺院)前の芝生や背後のマルガラ丘には熱帯の要素として知られるオオシロアリタケ(*Termitomyces* 属)がたくさん顔をだす。このきのこは、地下のシロアリが育てたもので、きのこの柄に沿って掘り下げると、大きなシロアリの巣が見つかる。シメジに似て大変な美味であるが、現地のパキスタン人は傘のついたきのこは食べない。しかし、ほかの国では同量のウナギと取り引きされるほど高価で、アフリカの市場で売られている。このきのこを育てるシロアリは、キノコシロアリ亜科に属し、進化的には比較的高等である。家を食い荒らすイエシロアリやヤマトシロアリと異なって、木材のセルロースを分解する微生物を宿していないので、セルロース分解能のあるきのこを利用して栄養をとっているものと思われる。

イスラマバードから北のハザラ地方やカガン谷の標高1000から2000メートルの丘陵地はパキスタンで最大のきのこの宝庫である。この地域は、パンジャブ・ヒマラヤの南山麓に相当するので、夏のモンスーンのために2000ミリを越える年間降雨量があり、大規模な森林が発達している。避暑地で有名なマンセーラ地区には黄金色のコガネタケ(*Phaeolepiota aurea*)、日本でもおなじみのヒラタケ(*Pleurotus ostreatus*)、ハツタケ(*Lactarius hatsudake*)、ブナシメジ(*Hypsizigum ma*

図1 パキスタンの北部



rmoreus)などが採れる。インドとの国境紛争にまきこまれているアザド・カシミールもきのこの豊富な所であるが、残念ながら外国人は立ち入り禁止になっている。

パンジャム・ヒマラヤを越えてカラコルム山域に入ると、しだいに雨が少なくなって、半砂漠の乾燥地が多くなる。しかし、その南部のバグロット谷やナルタル谷はまだ比較的雨が降り、3000メートル前後にはアオマツ、ヒマラヤカンバなどの森林が発達している。しかし、きのこの種類や数量はパンジャム・ヒマラヤに比べればはるかに少ない。1996年6月の井上の観察では、ハラタケ目のきのこ3種と腹菌類のきのこ1種しかみつけれなかった。標高3100メートルのナルタル谷のアオマツの林に生育していたきのこは、日本きのこのセンターの長沢栄史氏の鑑定で、キシメジ科のマツカサキノコ属 (*Strobilurus*) の一種で、北米に分布する *S.albopilatus* に近いと判定された。地上または地下の球果(松かさ)や落枝を餌として生育するきのこで、日本でも5種類知られている。

同じ年の6月、ギルギットの東隣りにあるバグロット谷を訪れた(図1参照)。このバグロット谷は、外国人があまり立ち寄らない所で、もちろんきのこに関する調査報告はない。ヒナルチェ氷河のモレーン脇のウェップバラの疎林(高度3300メートル)の中に、まんじゅうのように膨らんだ

傘をもったきのこ、菅傘のように縦の条線の入ったきのこの2種類が生えていた(写真1、2)。いずれも、現地のシーナ語ではウェイシント(Way sinto) 英語では water mushroom (水きのこ) という。長沢氏の鑑定では、前者はモエギタケ科 (*Strophariaceae*) に属するもので、形態的な特徴が不足しているため断定できないが、多分シビレタケ属 (*Psilocybe*) のもの、後者はフウセンタケ科 (*Cortinariaceae*) のケコガサタケ属 (*Galerina*) のものと思われた。シビレタケ属のきのこには幻覚性の中毒を起こすものが多く、ケコガサタケにはコレラタケのような猛毒菌が含まれており、現地語の水きのこは水のような下痢を引き起こすためと推定された。シビレタケの仲間、*P.coprophila* は、1956年、本多勝一氏によってギルギット近くの牛糞から発見され、本郷が鑑定している。ケコガサタケ属は隣接するカシミール地方に多い。

このほか、バグロット谷では、頂部にチューブ状の口のついた直径2センチくらいの白いボール



▲写真1. バグロット谷のシビレタケ属きのこ



▲写真2. バグロット谷のケコガサタケ属きのこ

状の腹菌類きのこが発見された。吉見昭一氏の鑑定で、ケシボウズタケ属 (*Tulostoma*) のものと判定された。乾燥地帯に多く、日本ではまれにしか見かけない貴重なきのこだという。パキスタンには15種が記載されている。現地のシーナ語で、デュースント (*du sinto*)、英語で *milk mushroom* (ミルクキノコ) といわれる。食べると美味しいので、その名がつけられたものと推定される。同じきのこは頭部のフーシェ谷でも認められているので、カラコルム全域に分布しているものと考えられる。このきのこは、7-8月にはさらに大きく成長し、食べると大変うまいという。傘のついたきのこは食べないが、腹菌類のきのこは現地の人も食べるようである。秋には、黒い胞子を作り、これを採集して傷口につけると、感染が治るといわれ、現地ではローカルドクター (田舎医者) として珍重されている。日本や中国でも、黒穂病菌の胞子を傷の止血剤や咽喉炎に内服するので、洋の東西と問わず、人間の知恵は似ていることが分かる。

バグロット谷からさらに北上したワンザのウルタル谷に入ると、標高3000メートル付近の疎林の草地で別の腹菌類きのこが見出された (写真3)。一見バグロット谷の腹菌類きのこに似た白いボール状のきのこで、現地のブリシャスキー語でシュウシン (*Shoushin*) という。しかし、吉見氏の鑑定では、コツブタケ科 (*Pisolithaceae*) のタマゴツブタケ (*Pisolithus tinctorius* f. *pisocarpus*) と思われた。これは食用にはならないようである。

カラコルムの乾燥地帯には、植物がほとんど生えなくなり、きのこも存在しなくなる。しかし、まれに珍しいきのこに出会うことがある。フンザの東、ナガールの最奥にあるホパール部落からホパール氷河を横断した先のシスキン台地を1993年5月に訪れた。典型的な乾燥台地 (標高3000メートル) で、草がまばらにしか見られなかったが、突如として、ラグビーボールのような卵型のきのこが、あたかも竹の子のようににょきにょき顔をだしたのにはびっくりした (写真4)。その後大きいものは30センチの高さに成長した。灰色の表面に黒い斑点のある楕円形のボールで、割ると中

▼写真3. ウルタル谷のタマゴツブタケ



▼写真4. ホパール氷河脇の巨大腹菌類きのこ



は空洞で、黒い胞子が煙りのように立ち上った。このきのこは吉見氏の意見では、エツキホコリタケ目のエツキホコリタケ (*Podaxis*) 属かスナタマゴタケ (*Endoptychum*) のきのこで、俗に「砂漠の卵」とよばれてるものに近いという。エツキホコリタケは1956年に、本多氏がカシミールで採集している。本多氏のきのこにはきちんとした長い柄が認められるが、井上が現地で観察したかぎりでは、シスキンのきのこの地上部には柄がなく、むしろ形や大きさはスナタマゴタケに似ている。同じきのこはシスキンからバルブ氷河を越えた対岸のラスファリ (標高4000メートル) でも見られることから、ナガールからヒスパーにかけた地域に生息するものと思われる。それにしても、一見水分のまったくない所で、どうやって水を補給しているのか不思議である。

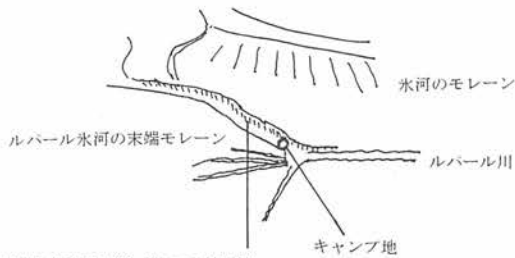
2. ナンガ・パルバット、ルパール谷のヤナギの林に生息するきのこ

ナンガ・パルバット (8126m) はパキスタンの北部、東経74度34分、北緯35度15分に位置する世

▼ナンガ・パルバット南面



ナンガパルバット南面



ヤナギの生育する小谷 (きこの観察地)

図2 ナンガパルバット・ルパール谷、シャイギーの柳谷

界で7番目の8000m峰である。パンジャブ・ヒマラヤの主峰で、ヒマラヤ山脈の最西端に位置する。1998年7月に井上はナンガ・パルバット南山麓のルパール谷(高度3660m)のヤナギの林できのこの分布を調べた。(図2参照)

観察場所：観察はルパール谷の奥にあるシャイギーと呼ばれる夏の放牧地近くの天然のヤナギ林で行った。ルパール谷は燃料用と過放牧のために昔

結果

ハラタケ目

ヒトヨタケ科 Coprinnaceae	ヒトヨタケ属 Coprinus	ウシグソヒトヨタケ C.cinereus コキララタケ C.radians	黒色胞子 (10X6 μ m) 牛糞の上に群生 黒褐色胞子 (7X5 μ m) 若いと白い斑点	26株 10株
	その他のヒトヨタケ属きのこ	ヤナギの落葉に生育	初め卵型、後に釣鐘型 黒色胞子形成	5株
	ナヨタケ属 Psathyrella	ムジナタケ .P. velutina	黒褐色胞子 (10X5 μ m) ヤナギの倒木の下に生息	8株
	フウセンタケ科 Cortinariaceae	フウセンタケ属きのこ Cortinarius	黄褐色胞子 ヤナギの外生菌根菌	8株

の森林が消滅して、現在、下部は耕作地や牧草地になり、上部は優性のジュニパー (*Juniperus* sp)が多く、一部にカバノキ (*Betula utilis*) とヤナギ (*Salix* sp.) が散在していた。シャイギーのヤナギ林はルパール氷河末端に、幅50m、長さ1kmに渡って南北に展開し、ヤナギの大部分は直径10cm以内、高さ3-5mの比較的小さな樹木であった。土質はかつてのルパール氷河の融け水の氾濫地帯のため、氷河の運んできたシルト(砂よりもはるかに微細な岩粉)が主体で、その上にヤナギの落ち葉が薄く集積していた。ルパール谷には8月から9月にかけてモンスーン由来の降雨があるが、ネパール・ヒマラヤに比べて降水量は少なく、むしろ冬季の地中海方面からの低気圧による降雪が多いといわれる。降水量の観測記録はないが、モンスーンの影響を強く受ける南の丘陵地帯のマリの年間降雨量は1800ミリ、モンスーンの影響を受けない北のギルギットでは186ミリで、ルパール谷はその中間と考えられる。しかし、きのこの生育にもっとも影響を与えているのは、春から初夏にかけての雪解け水である。現地で afternoon streamと呼ばれるごとく、太陽熱で融解した雪水が午後から流れ出して、再び凍結する夜間には止まる小川である。シャイギーのヤナギ林にもその流れた跡が認められ、観察時にはかなり湿っていた。

きのこの観察：ヤナギの林で、約81株のきのこを観察した。なお一部は、シャイギーより8キロ下流の高度3400mの池のほとりのヤナギ林でも観察した。ここには、直径1mを越える大きなヤナ

	チャツムタケ属きのこ Gymnopilus	腐植土に生息	1株
モエギタケ科 Strophariaceae	センボンイチメガサ属 Kuehneromyces	センボンイチメガサ K.mutabilis 明黄褐色胞子 ヤナギの切り株 (7X4 μ m)	2株
	スギタケ属 Pholiota	ヌメリスギタケモドキ P.aurivella 黄褐色胞子 (8X5 μ m) 生きているヤナギの幹に生息	1株
キシメジ科 Tricholomataceae	ザラミノシメジ属のきのこ Melanoleuca	白色胞子はメルツアーで青黒く染色	1株
オキナタケ科 Bolbitiaceae	フミズキタケ属 Agrocybe	ヤナギマツタケ亜属きのこ Aporus 暗褐色胞子 (9X5.5 μ m) 粗面 ヤナギの切り株に生息	2株 1株
ヒダナシタケ科			
イボタケ科 Thelephoraceae	クロカワ属きのこ Boletopsis	胞子未形成のため暫定 若い時はイグチ形をした大型のきのこ	8株
ホコリタケ目			
ホコリタケ科 Lycoperdaceae	ホコリタケ属きのこ Lycoperdon		8株

きも見られたが、きのこの数はシャイギーリのものに比べて少なかった。

きのこはその生活様式から、腐生性と外生菌根性のものが大部分で、内生菌根性のものはきわめて少ない。今回の調査でもっとも注目されたのは、ヤナギの生木に寄生するハラタケ目のきのこである(写真5-1)。高さ1.5mのヤナギの幹に寄生していたきのこが子実体を形成すると同時に、寄生部位の幹が異常増殖して一種のこぶを作って子実体を落下させるが、ヤナギ自体は枯れることはない。このきのこはおそらくヤナギの内生菌ではないかと推定される。ヌメリスギタケモドキが属



▲写真5-1. ヌメリスギタケモドキ

するモエギタケ科のきのこは、すべて腐生性で、外生菌根は作らず、木材腐朽菌も少なくない。とりわけスギタケ属の多くは、広葉樹の立ち木、枯れ木の幹に束生し、材質の劣化や枯死を招くといわれる。ヌメリスギタケモドキは村上康明氏によって1991年にハザラ地方(高度2000メートル)で朽木の上から採取されている。この点、ヤナギの生



▲写真5-2. ヤナギの幹にできたきのこの寄生跡

▼写真6. ルパール谷のヒトヨタケ属きのこ



木に寄生して、しかも枯死させないルパール谷のきのこは珍しく、他地域のヌメリスギタケモドキと同一とは言い難い。

ヌメリスギタケやスギタケはナメコに似た舌触りがして美味しい食用きのこであるが、ルパール谷・タラシン村のアザカーンの証言によれば、ヌメリスギタケモドキも昔はたくさんヤナギに寄生していたのを見たが、味が美味なので家畜（主にロバ、山羊は食べない）に食べられてしまったという。加えてヤナギの伐採が進み、結果としてこのきのこの数が極端に減少して今や貴重な菌類になったという。事実、今回の調査でも一株しか見かけなかったが、下流のヤナギの巨木には、写真5-2に示すごとく無数のこぶができていて、昔はきのこが多量発生したことがしのばれる。他のきのこが多く秋に出るのに対して、このきのこは春に出る点が変わっている。パスー出身のガイドであるベイグの話では、ヌメリスギタケモドキはフンザ上流のパスーでも見かけるといふ。パキスタンには、生木に寄生するきのこは珍しくなく、ガンダーラ遺跡で有名な北部丘陵地のタキシラで見かけたサルスベリの巨木にも、たくさんのこぶが見られた。現地の人々の話では、秋に白と褐色の2種類のきのこが寄生するためだという。この外、カラコルム・ヒマラヤでは、別のヤナギ（中心部が白く、周囲が黒いきのこ）、ウェップバラやポプラの生幹にもきのこがよく寄生するといわれる。

今回観察したヤナギの林でのきのこは、全体としてヒトヨタケ科のような腐生菌が多く、氷河の運んできたシルトからなる貧土で雑草も少ないことから、主にヤナギの落ち葉を栄養源として生息

▼写真7. ルパール谷のウシグソヒトヨタケ



するものと考えられる。なかには直接ヤナギの枯れ葉から子実体が生成していた（写真6）。ヒトヨタケ属きのこの幼菌は卵型であるが、成長すると釣鐘型になり、採集後は黒化した。ウシグソヒトヨタケ（写真7）は、放牧されていた牛の糞からも発生していた。近縁のヒトヨタケ（*C. atramentarius*）は、1956年に本多氏がカシミール地方で採集している。ヒトヨタケは酒の悪酔いをもたらすことで知られているが、カシミールでは現地の人が春に採取したものが市場で売られているようである。ウシグソヒトヨタケも幼菌は食用になるが、糞に生えたきのこで分かれれば食欲はわからない。糞生菌の胞子は動物の消化管を通ることで目を覚まし、糞の栄養を利用して発育することが知られている。

コキララタケ（写真8）は幼菌のうちには白い斑点が認められたが、成長すると斑点は消えて全体の褐色が強くなった。ムジナタケはたぬきの毛皮に似ているのでその名がついたが、食用菌で北半球にひろく分布する。

高山のような厳しい環境下に生育するヤナギのような樹木は、ほとんどが外生菌根菌をつけるといわれる。実際、写真9に示すようなフウセンタケ属きのこは、北半球の代表的な外生菌根菌で、ヤナギ科、ブナ科、マツ、カバノキなどの樹木と菌根をつくって共生することが知られており、今回の調査でも多数見つけられた。しかし、チャツムタケ属のように、外生菌根をつくらないきのこも少なくない。このきのこは今回は1株しか見つけなかったが、カシミール地方には広く分布している。オキナタケ科のきのこもカシミールには

▼写真8. ルパール谷のコキララタケ



多く、ポプラの腐木に発生する *Agrocybe cylindracea* などが知られている。センボンイチメガサは1990年に柴田尚氏によってパキスタンで初めて単離された。広葉樹の切り株などに多数束生する小型のきのこで、食用になる。

ヒダナシタケ目のきのこは、イグチ形をした大型のきのこ（写真10）で、形態的にはクロカワに似ているが、胞子がまだ成熟していなかったのと同定はできなかった。クロカワはほろ苦味のある食用菌である。ヒダナシタケ目のきのことして、フンザ地方には、現地のブルシャスキー語で、マルタッシュ（maltash）と呼ばれるサルノコシカケが見られるという。

腹菌類は写真11に示す1種しか観察できなかったが、ナンガ・パルバットより北に位置する乾燥したカラコルム山脈ではかなり分布しているようである。

おわりに

長い間秘境といわれたカラコルム・ヒマラヤに



▲写真10. ルパール谷のヒダナシタケ目きのこ

▼写真9. ルパール谷のフウセンタケ属きのこ



は、珍しいきのこがたくさんあるに違いないという期待と夢を抱いて方々トレッキングしたが、結果的にはあまり収穫がなかった。とどのつまり、カラコルム・ヒマラヤには固有の珍しいきのこは少ないことを確かめた結果に終わった。新種のきのこは発見できなかったが、巨大なラグビーボールのようなきのこや生木のヤナギに寄生する黄金のきのこに出会えたのは大変幸運であった。華やかな高山植物に比べて、地味でやや内気なきのこ類であるが、生き物の少ない辺境の旅では小さなきのこといえども多くの楽しみを与えてくれることは確かである。登山隊の場合は、山頂に立つという明白な目的があるが、トレッキングの場合とはとにかく外国の片田舎に行ってきたという事実にとどまって、達成感や充実感がやや少ないくらいがある。これに学術調査が加われば、帰国後の研究と調査で、楽しさが倍加されるというものである。



▲写真11. ホコリタケ属きのこ（左の2つは別種）

謝辞

バグロット谷とナルタル谷のハタラケ目のきのこを鑑定していただいた日本きのこセンター、菌蕈研究所の長沢栄史氏、腹菌類の鑑定をしていただいた京都市教育委員会の吉見昭一氏に厚く感謝する。

参考文献

- 1) S.Ahmad : Fungi of Eest Pakistan. Pakistan Monograph. No.1.Lahore (1956)
- 2) S.Ahmad : Gasteromycetes of West Pakistan, XXVI, Panjab University Press, Lahore (1952)
- 3) T. Hongo : Fungi of Hindukush collected by Mr. K. Honda. Acta Phytotax. Geobot.,21,117-118 (1965)
- 4) R.Watling, N.M.Gregory : Larger fungi from Kashmir. Nova Hedwigia, 32, 493-564 (1980)
- 5) H.Shibata : Higher Basidiomycetes from Pakistan. Cryogenic flora of Pakistan. Vol.1,145-164 (1992)
- 6) Y.Murakami : Larger fungi from Northern Pakistan. Cryptogenic Flora of Pakistan. 2,105-147 (1993)
- 7) S. Yoshimi, H.Hagiwara : Gasteroid fungi from Pakistan. Cryptogenic Flora of Pakistan, Vol. 1. 165-184
- 8) 井上重治 : カラコルムのきのこ、パーキスタン、154、20-26 (1997/1998)

2002年H A J サマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフの配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

尚、パキスタン登山の申請は、年内に行わなければならないので、希望者は早目の申込みにご協力下さい。

記

1. 期間 : 2002年7月19日(金)～8月26日(月)
2. 募集人員 : 10名程度
3. 負担金 : 75万円
4. 資格 : 冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切 : 11月30日 (定員になり次第〆切)
6. その他 : H A J の登山隊は、「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿に参加の義務があります。

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ば

チベット ニンチン・カンサ(7,206m)

れる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。H A J は既に2回登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間、ルートは1998年にH A J 隊が初登攀した西稜を予定しています。

記

1. 期間 : 2002年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員 : 10名程度
3. 負担金 : 85万円
4. 資格 : 冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切り : 定員になり次第
6. その他 : H A J の登山隊は、「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿に参加の義務があります。

地域ニュース

《ネパール》

9座をオープン

ネパール政府は5月15日新しく9座をオープンすると発表した。登山は今年春期から可能。

山名	標高	地域	備考
ローツェ中央峰	8,413m	マハラングル	クーンブ
ピーク38	7,590m	"	"
フンチ	7,036m	"	"
ヌムリ	6,677m	"	"
テンカンポチェ	6,500m	"	"
ネセルク	5,927m	"	"
P2	6,251m	マナスル	ゴルカ
タバ・ピーク	6012m	ダウラギリ	ムスタン
トラン・ピーク	5,751m	アンナプルナ	マナン

エヴェレスト最高令登頂記録を更新

ネパール側から登頂を目指していたアメリカ人のシェルマン・ブル(64)が5月25日登頂に成功し、最高令記録を塗り変えた。息子も同時登頂した。

尾崎隆がマカルー登頂

外国隊のガイドとしてマカルー(8,463m)登山隊に参加していた尾崎隆が5月12日ノーマル・ルートから登頂した。

《中国》

東海大隊がクーラ・カンリⅡ&Ⅲに初登頂

西藏大隊と合同でクーラ・カンリ山群に挑戦していた東海大学隊(出利葉義次隊長ら(43)ら12名)は、北面から5月3日、Ⅱ峰(中央峰7,418m)に川村厚志(41)、山中康正(30)両隊員が、チベット側3名と共に初登頂した。次いで4日にもⅢ峰(東峰7,381m)に出利葉隊長、片岡洋介(38)、土屋直人(35)、笹尾玄(28)、平出和也(21)、妹尾典宏(23)隊員がチベット側3名と共に初登頂した。同隊は主目的であるⅠ峰への縦走を目指したが、5日はホワイトアウトで断念。6日はⅡ峰を越え

たものの天候悪化のため断念した。

石川直樹がチョモランマ登頂

国際公募登山隊に参加してチョモランマ(8,848m)に挑戦していた石川直樹(23)が5月23日北稜ルートから登頂に成功した。

エヴェレスト最年少記録更新

北稜ルートから挑戦していたネパールのテンパ・チリ・シェルパ(15)が5月22日登頂に成功し、最年少記録を更新した。

《パキスタン》

外務省海外情報

パキスタンでは今年に入り、ギルギット地方ナング・パルバット(8,126m)のベース・キャンプ付近で日本人女性が暴行を受け、金品を奪われ死亡し、ギザル周辺でも外国人夫妻が殺害されるという事件が発生しています。

同地域周辺では過去にも同様な事件が発生していますことから、ギルギット地方を旅行する方は、1～2名での行動は避け、現地事情に詳しいサポーターを依頼し、4～5名以上で行動するように注意して下さい。

日本への郵便料金

絵ハガキ22Rs. 封書30Rsとなった。

トピックス

海外の山を知ろうパートV

「今、トレッキング・ピークが面白い」 ランタン、アンナプルナ編

恒例となりました「海外の山を知ろう」ではネパールのトレッキング・ピークをテーマに、前回の「クーンブ・ヒマラヤ」編に引き続き「ランタン、アンナプルナ」編で開催致します。講師に飛田和夫氏、海外委員によるスライドを交え最新の情報満載でお送り致します。ネパール・トレッキングピークに興味ある方のご参加をお待ちしてお

ります。

記

主催：東京都山岳連盟・海外委員会

日時：2001年7月12日（木）19時15分～21時

（18時30分受付開始）

場所：豊島勤労福祉会館 Tel 03-3980-3131

参加費：500円（当日会場にてお願い致します）

問い合わせ：東京都山岳連盟 Tel 03-5524-5231

ヒマラヤから

GI～GII便り

只今、私達はスカルドにて最終準備を行っております。おかげさまで全員元気にここまで来ることができました。ここからが本番ですので、最大の力を出して、2つの頂に立ってまいります。良い結果を報告できるよう、頑張ってきてます。

5月24日 スカルドにて

明治大学ガッシャーブルム登山隊 2001

Books

未踏峰 クーラ・カンリⅡ（7,418m）

本会がチベット登山協会と合同で挑戦した登山隊の報告書。北面からⅡ峰（未踏峰）～Ⅰ峰（7,538m）の縦走を目指したもののクレバスに阻まれて縦走を断念した。本年5月3日にⅡ峰は東海大学と西藏大学の合同隊によって初登頂された。

B5判 94頁 2001年4月22日刊

価格2000円＋送料240円

東京集会のお知らせ

日時 6月25日（月）午後7時～

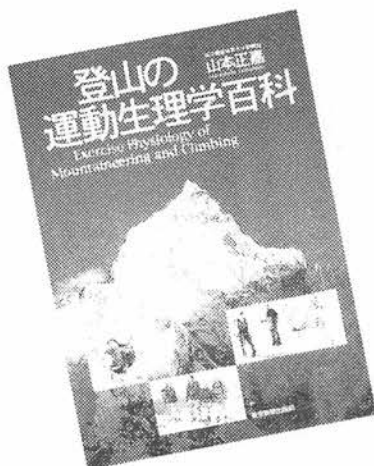
内容 カラコルム・ヒンズークシュ登山地図について

場所 HAJルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分）
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分）

「身体の仕組みを知って、安全登山を!!」

登山の運動生理学百科

山本正嘉 著（国立鹿屋体育大学助教授）



「登山で疲れる原因は何か」「中年や女性登山者でも快適に登るためには?」「適切なトレーニングABC」「あなたにもできる高所登山」など登山全般を網羅。

初級者からベテランまで幅広い登山者を対象に、登山と健康、疲労、中高年者・女性の山歩き、トレーニング法を詳述。クライミング、高所登山も科学的データをもとに解説。著者は、ヒマラヤをはじめとする高所登山家であると同時に、スポーツ生理学の専門家。

●A5判・並製 ●価格：本体2000円＋税

東京新聞出版局(中日新聞 東京本社) 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 ☎03-3740-2674(直) FAX03-3458-0689

第22回インド・ヒマラヤ会議報告

HAJ主催による新春恒例のインド・ヒマラヤ会議は、今年22回目となり1月28日東京・池袋の勤労福祉会館で行われた。

会議には前日の大雪にもかかわらず全国から2000年実施隊や2001年にインド・ヒマラヤへ出掛ける予定の登山隊関係者など31名の参加をみた。

HAJの山森欣一理事長が開会の挨拶を行い、とくに「1」の付く年は過去遭難事故が多発していることに触れ「各登山隊の注意」を喚起した。

会議では、

9時40分～正午「2000年隊登山報告」

登稜会のムルキラ（柳稜氏）、栃木県庁谷峰会のGepang Goh-I（田沢孝氏）、東京理科大学のスピティ地区無名峰（加藤孝子氏）、やまくら同人のストック・カンリ（小林正己氏）についてスライドを交えて報告された。

13時～14時20分「インド登山の実務」

HAJ中川裕常務理事から最近のインド・ヒマラヤ登山の現状やそれに対応するための対策の現状について報告があり、特定の事項については各登山隊の経験者から経験談が披露された。

14時半～16時半「インド・ヒマラヤの魅力」

労山元会長で現在マナリに在住の森田千里氏がスライドを中心にヒマチャル・プラデシュ、スピティ、ガルワール、ガンゴトリなどの山々について豊富な経験をもとに魅力の数々を語った。

これで予定の会議日程を終了し、HAJ八木原囃明常務理事の挨拶で閉会となった。

インド・ヒマラヤ2000

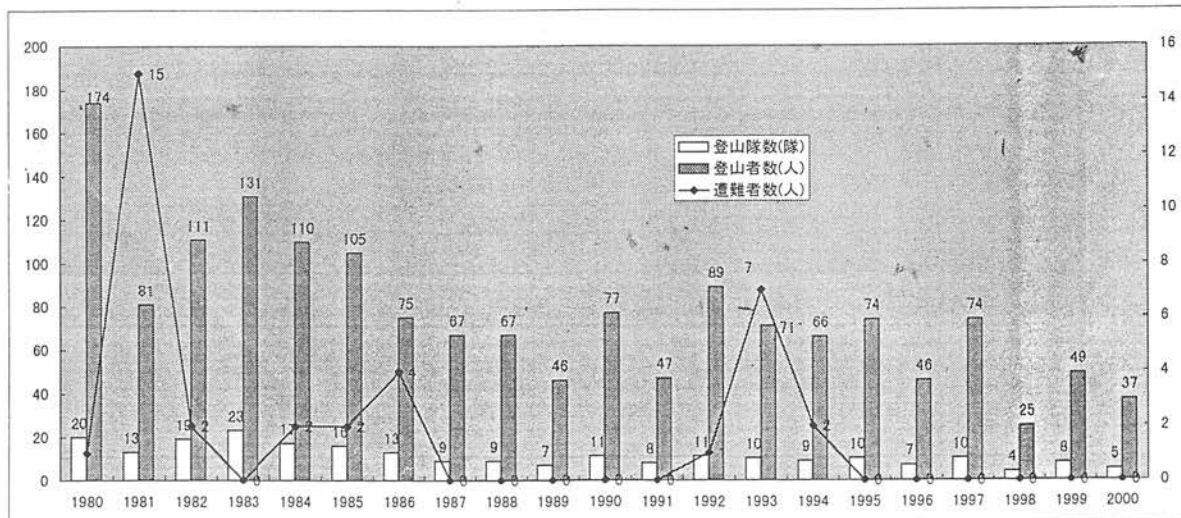
遅ればせながら昨年のインドヒマラヤの記録をお伝えする。残念ながら完全ではないが現時点で確認できたものだけを一覧にまとめてみた。

主だった成果としては、99年にアルワ・タワーと共に英国隊の挑戦を受けながら未踏を誇ったアルワ・スパイアー（6193m）がケントン・ローク隊長以下5名の英国隊の再度のチャレンジに陥落した。当初の目標北壁を諦め北東稜から10/11に登頂したが、頂上の6m下で、ハングに阻まれ最高点には到達できなかったという。

もうひとつの英国隊、ガイドのマーティン・モラン隊長以下名はニルカント西稜新ルートからの6/1登頂に成功した。どうやらこの登山隊はガイドによる公募登山のようだ。この登山について

最近の日本隊の入山と遭難の推移 ※1994年以降は把握できたもののみ。

	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	合計
登山隊数(隊)	20	13	19	23	17	16	13	9	9	7	11	8	11	10	9	10	7	10	4	8	5	239
登山者数(人)	174	81	111	131	110	105	75	67	67	46	77	47	89	71	66	74	46	74	25	49	37	1622
遭難者数(人)	1	15	2	0	2	2	4	0	0	0	0	0	1	7	2	0	0	0	0	0	0	36
死亡率	0.57%	18.52%	1.80%	0.00%	1.82%	1.90%	5.33%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	1.12%	9.86%	3.03%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	2.22%



2000年インド・ヒマラヤ日本隊結果

山 名	標高	地 域	季	派遣母体/隊名	隊長名	数	ルート	成否	備 考
ムルキラ	6,517	セントラル・ラホール	夏	登稜会	柳 稜	3	西面	×	氷河の状態が悪く、ダラギリ氷河5,100mで断念。
メントーサ	6,443	セントラル・ラホール	夏	大阪府高体連	小畑和人	11	東稜	○	
ストック・カンリ	6,153	ジャム&カシミール	夏	やまくら	小林正己	6	南西稜	○	8/13・14に全員が登頂。
無名峰	6,140	スピティ	夏	東京理科大OB	加藤孝子	13		○	8/5・7に全員が登頂。Da
Gepang-Goh I 峰	6,053	ヒマチャル・ブラデッシュ	夏	宇都宮谷峰会	田沢孝	4	東稜	×	wa Kangriと命名。 悪天の為に5470mで断念。
						5 隊	37人		

2001年インド・ヒマラヤ日本隊計画

山 名	標高	地 域	季	派遣母体/隊名	隊長名	数	ルート
ビハリジョット北峰	6,290	HPチャンバ	夏	長野労山	坂本昌士	10	西面
ニルカンタ	6,596	ガンゴトリ	秋		鳴海大助	7	北面
フルーテッド・ピーク	6,149	スピティ	夏		山中八千代	5	
ガングスタン	6,162	セントラル・ラホール	夏	JAC東海	鈴木常夫	8	南西稜
ガングスタン	6,162	セントラル・ラホール	夏	JAC東海	水野起己	6	北壁

はホームページ www.moran-mountain.co.ukで詳細を知ることができる。

80年に東大隊が初登攀したシブリン (6,542m) 北稜はルートの最後で弱点に沿って右手にルートをとっている。昨年春、エルキャプタンにオールフルーのルートを開くなど、世界的に有名なドイツのフーバー兄弟が、北稜のファイレクトフィニッシュを完成するべくやってきた。悪天と弟のアレックスのリタイアで登山を断念、固定ロープなどの撤収に向かった兄のトーマスは、日本ルートを敗退してきたスイス人イワン・ウォルフと北稜上で会い、即席のパーティーを組み5/31に目的を達成した。いわく、「(アメリカン・エイドの) A 5 あるとはいいたくないけど、もし君があそこで落ちたら大変なことになると。」ルート名「Shiva's Line」核心部はボルトなど打つこともできない不安定な岩で、広がってくるクラックを使っての人工登攀だった。

98年ムクト・パルバット・イースト (7130m) の初登頂が、翌年のインド隊によって前衛峰までとされてしまった韓国隊が再び同峰に挑み同峰の第2登と、アビ・ガミン (7350m) に西稜新ルートからの登頂に成功した。韓国隊はテレィ・サガール (6904m) 北西稜にも成功している。

一昨年はパキスタンとの国境問題で入山ができなかったヌン・クン山群にも、昨年はクン (7077

m) に3隊が入山。登頂に成功した。ただ、許可リストを見るとクン東峰 (6930m) となっている、今年はクン東峰 (7077m) となっている。

東部カラコルムへはヒマラヤ「348号」で紹介した通り、H・カップディア隊長等インド側6名フランス4名の合同隊は東部カラコルムに入山し、リモIV峰に登頂すると共に、インド側隊員は古の中央アジア交易路、カラコルム・パスと中央リモ氷河からイタリア・コルを訪れた。サセール・カンリ (7672m) にもインド隊が登山をしている。

尚、昨年春にカンチェンジュンガ (8,586m) 北東支稜に挑んだオーストリア隊の隊長ウィリ・パウワーは、1929、31年とカンチェンジュンガ北東支稜のドイツ隊を率いたあのパウル・パウワーの息子である。この登山隊にはウィリの娘、マルチナも参加していたという。残念ながら親子三代にわたる挑戦も、悪天のために6200mで三度涙をのむ結果となった。

東部クマオンの未踏峰ブルブ・デュラ (6210m) が昨年初登頂された。99年にIMF隊の挑戦は南峰のみの登頂という結果になった。昨年6月に8名からなる登山隊を派遣、ところが雪崩により隊員が負傷し敗退、続いて9月に三度IMF隊が挑み、9/27に初登頂した。

(中川 裕)

インド・ヒマラヤ 2000

	山 名	標高	ルート	国	期間	隊 長	数	結果
1	Kanchenjunga	8586	NE-R	オーストリア	3-5	Willi Bauer	10	×
2	Nanda Devi	7816		インド	9-10	M Rashid	20	—
3	Kamet	7756		インド	9-10		12	○
4	Saser Kangri	7672		インド	8-9	Rakesh Kumar	8	×
5	Abi Gamin	7355		韓国	7-9	Namil Kim	15	○
6	Mukut-Parbat East	7130						○
7	Rimo-IV	7169	W-R	印=仏	7-9	H・Kappadia	10	○
8	Kun East	7077		フランス	7-8			○
9	Kun East	7077		フランス	7-8			○
10	Kun East	7077		フランス	7-8			○
11	Satopanth	7075	N-R	スペイン	5-6	E C Cabrera	8	×
12	Satopanth	7075	N-R	インド	8	Patade Rajesh	5	×
13	Satopanth	7075	N-R	スイス	9-10	Christine Kopp		×
14	Sri Kaiilash	6932		インド	5	Sunand Kumar	16	○
15	Sri Kaiilash	6932		インド	6-7	Maj..K S Dhami	8	○
16	Thaley Sagar	6904	NW-R	韓国	8-9	Hwang Won Chel	8	○
17	Nanda Kot	6861		インド	10	Basanta S Roy		×
18	Deoban	6855		インド	6-7	Pallab Das	16	×
19	Kedardome	6830		イギリス	5	Rob Colliser		—
20	Kedardome	6830		フランス	5			—
21	Chandra Parbat	6728		インド	5-6	P C Nath	13	○
22	Gabgotri- I	6672		イタリア	9-10	Mussino Pagani	8	×
23	Gabgotri-III	6577		インド	5-6	Prakash Walvekar		×
24	Shivling	6543	W-R	フランス	5	E.Ratouis	5	○
25	Shivling	6543	N-R	ドイツ	5-6	Thomas Huber	2	○
26	Shivling	6543	N-R	スイス	5-6		2	○
27	Shivling	6543	W-R	インド	8-9	Dilip Naskar	6	×
28	Shivling	6543	W-R	フランス	8-9	Emmanuel Pozzera	7	×
29	Shivling	6543	N-F	フランス	9	M.Francois	7	×
30	Shivling	6543	W-R	アメリカ	9-10	Karen Maneil	4	○
31	Shivling	6543	W-R	スイス	10	F.Markus	2	×
32	Chirbas	6529		インド	5-6	Dr S C Biala		×
33	Mulkila-IV	6517		日本	7-8	柳 稜	3	×
34	Bhagiirathi II	6512	E-F	フランス	5	E.Ratouis	5	○
35	Sudarshan Parbat	6507		インド	5-6	Ghosh Chowdhaary		×
36	Sudarshan Parbat	6507	E-R	インド	6-7	Rajendra S Pal	12	○
37	Sudarshan Parbat	6507	E-R	インド	8	Bivujit B.Mukhoty	12	×
38	Jogin- I	6465		イギリス	9-10	Paul Farmer	6	×
39	Bhagiirathi III	6454	W-R	スウェーデン	8-9	Hendrick Kuiper	2	×

40	BhagiirathiⅢ	6454		ドイツ	9-10	Walter Hoelzler		×
41	Menthosa	6443		日本	7-8	小畑 和人	11	○
42	Bander puunch	6320		イタリア	5-6	Luca Gasparini	5	○
43	Kangla Tarbo- I	6315		アイルランド	8-9	Patrick O Leary	6	○
44	Snow Cone	6311		インド	6-7	Biplab Sengupta		○
45	Unnammed Peak	6250		イギリス	7-8	Graham Boswell	11	○
46	Unnammed Peak	6222		日本	7-8	加藤 孝子	14	○
47	Burph Dhura	6210		インド	6-7	R.C.Bhardwaj	8	×
48	Burph Dhura	6210		インド		.S.Puri		○
49	Arwa Spire	6193	E-R	イギリス	9-10	Kenton Cool	5	○
50	Saiffee	6167		インド	5-6	Alok Virmani	10	×
51	Rataban	6166		インド	6	Suman Guhaneogi		×
52	Rataban	6166		インド	6	Amulya Sen		×
53	Rataban	6166		インド	8-9	Kaushik Bhattacharya		○
54	Stok Kangri	6153		イギリス	7-8	Stuart Roberston		○
55	Stok Kangri	6153		イギリス	7-8	David Urmaston		○
56	Stok Kangri	6153		日本	8	小林 正己	6	○
57	Stok Kangri	6153		インド	8-9	Somnath Mondal		×
58	Dzo Jango	6150		ドイツ	8-9	Herrmann Wihelm	15	○
59	Mt.Shiva	6142		インド	8-9	Gautam Bamik	16	×
60	South Parbati	6128	SW-R	イギリス	8-9	Oliver Sanders	3	×
61	Unnamed Peak(HP)	6127		インド	9-10	Parasanta Roy	8	×
62	Dzo Jango	6120		ドイツ	7	Georg Whilhelm		○
63	Jogin-Ⅲ	6116		インド	5-6	K Mukhopadhyay	8	○
64	Unnamed Peaks(HP)	6111		インド	8-9	Jyotirmoy Dutta		○
65	Kalindi	6103		インド	6-7	B.U.Krishna-murthy		○
66	Kalindi	6103		インド	8-9	Naryani H Jiwat		○
67	Gepang Goh- I	6050		日本	7-8	田沢 孝	4	×
68	Koteshwar	6035		インド	9-10	Alok Bhirimani	10	○
69	Thelu	6000		インド	5	Sandip Vaidya		×
70	Thelu	6000		インド	5-6	Samashree Banerjee	7	○
71	Rudugaira	5819		インド	5-6	Prakash Walvekar		—
72	Manali	5640		インド	6			—
73	P5242m	5242		インド	5	Pradeep Kr Kar	16	○

資料・IMFホームページ、「HIMAVANTA」、「クライミング」、「ハイ・スポーツマガジン」

■外務省海外渡航危険情報

(3)ヒマーチャル・プラデーシュ州については2000年7月13日、マナリーの北方ハムタ・バスにおいて、ドイツ人トレッカー2名が近くの村の山賊集団に銃撃され、1名が殺害されもう1名も重傷を負い、宿泊していたテントが焼き払われる事件が

発生した。8月25日には、クル地区において、スペイン人2名、英国人1名が襲われ、1名が重傷を負っています。トレッキングのシーズンにおいては、外国人を狙った同様の犯行が再発するおそれがあります。

ニンチン・カンサ（7,206m）登山計画

ごあいさつ

日本ヒマラヤ協会は、広くヒマラヤ地域の登山・踏査・自然科学・人文科学について研究・実践する、ヒマラヤ愛好者約800名で構成し、既に創立30年を越えた全国組織の任意団体であります。

本会は、1967年の創立以来インド、アフガニスタン、ネパール、旧ソ連、パキスタン、ブータン、中華人民共和国など広大なユーラシア大陸の山野を舞台として活動し、これまで登山・踏査だけでも80数隊を派遣し数多くの成果をあげて参りました。

ヒマラヤ登山熱が高まる中で、本会会員の中から身近な仲間や良きアドバイザーが居ないため、せっかくの夢を実現できない人達から、「休暇の取り易い時期」に、ヒマラヤ登山を実践したい、との希望が寄せられるようになりました。

本会ではこの要望に応えるため、1989年からインド・ヒマラヤを舞台に「サマー・キャンプ」を実施し、93年からは、中国、ムスタグ・アタ（7,546m）を加え、さらに97年から新しい舞台として中国、チベット自治区にありますニンチン・カンサ（7,206m）を選びました。岳人の誰にもある「チベットへの憧れ」と、新しい地域を目標にすることによって「未知への憧れ」をも満たせる舞台であると確信しております。また、本会の「サマー・キャンプ」は、総て結集した隊員による登山であります。現地においても隊員がルートを開拓し、荷上げを行い登頂を目指すことが原則であります。従って所謂「ガイド付き公募登山隊」とは全く異なる登山であります。

大自然の摂理は人知を遥かに越えております。これまでの経験を十分に活用しながら、細心の

注意を払い所期の目的を達成する所存であります。なにとぞ、趣旨を御理解いただきまして皆様の絶大なるご支援を賜りたくお願い申し上げます。

2001年 4月

日本ヒマラヤ協会

ニンチン・カンサ峰登山隊

隊長 酒井國光

計画の概要

1. 隊の名称

日本ヒマラヤ協会ニンチン・カンサ登山隊
2001年
(H A J Ningqin Kangsha Expedition
2001)

2. 派遣団体

日本ヒマラヤ協会

3. 目標の山

中華人民共和国西藏自治区浪卡県／江孜県
ニンチン・カンサ峰（寧青崗桑・Ningqin
Kangsha 7,206m）

4. 目的

- * ニンチン・カンサ峰の登頂（西稜ルート
を予定）
- * 山岳自然環境の保全（テイクイン、テイクアウトの実践）
- * 日本と中国の友好親善交流

5. 登山期間

2001年 7月20日～8月25日（37日間）

6. 隊の構成

酒井國光隊長以下 6名

7. 推進の組織

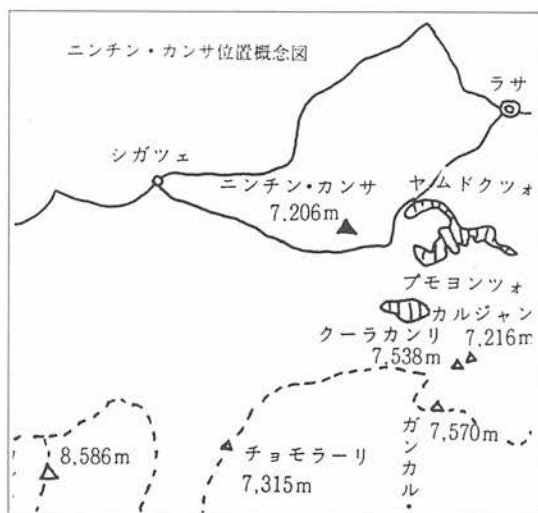
日本ヒマラヤ協会ニンチン・カンサ峰登山
隊実行委員会

会 長：山森 欣一
 (H A J理事長)
 委 員 長：酒井 國光
 (同 会長・隊長)
 副実行委員長：八木原罔明
 (同 常務理事)
 実行委員：尾形 好雄
 (H A J常務理事)

〃：岩崎 洋(同)
 〃：中川 裕(同)
 〃：野沢井 歩(同)
 〃：登山隊員

8. 隊の事務局(留守本部を兼ねる)

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4丁目2
 番7号 萬栄ビル501号
 日本ヒマラヤ協会
 ☎(03)3988-8474 FAX 03-3988-8502
 夜間：隊出発まで(02975)8-7337 酒井國光
 〃：隊出発後 (03)3680-2280 山森欣一



▲左端が主峰と西稜

日 程

7月20日 成田→成都(飛行機)
 21日 北京→成都(飛行機)
 22日 成都→ラサ(飛行機)
 23日～24日 ラサにて出発準備
 25日 ラサ→ヤムドクツォ(車)
 26日～28日 高所順応訓練
 29日 ヤムドクツォ～B C
 30日 }
 8月18日 } 登山期間(19日間)
 19日 ベース・キャンプ清掃日
 20日 B C→ラサ(車)
 21日～22日 ラサ滞在
 23日 ラサ→成都(飛行機)
 24日 成都→北京(飛行機)
 25日 北京→成田(飛行機)

隊員名簿(年齢は出発時)

隊 長：酒井 國光(1939.4. 生)62歳

- 1) 茨城県筑波郡
- 2) 聖徳大学附属小学校
- 3) 昭和山岳会
- 4) 1976 アメリカ、マッキンリー(6,194m)隊長
 1979 ヨーロッパ・アルプス(数座)隊長
 1980 ヨーロッパ・アルプス(数座)隊長
 1983 パキスタン、ビルチャール・ドバニ
 (6,134m)登攀隊長
 1984 中国、アムネマチンⅡ(6,268m)副隊長、登頂
 1986 アメリカ、ドラム(3,662m)隊長、登頂
 1988 パキスタン、ブロード・ピーク(8,051
 m)隊長、登頂
 1989 中国、シャラリ(6,032m)隊長代行
 1991 中国、シュエバオ・ディン(5,588m)
 隊長、登頂
 1992 中国、ダークニャン(5,355m)隊長、
 登頂
 1993 中国、ムスターグ・アタ(7,546m)隊長、登頂
 1994 ユイチュ(6,179m)隊長、登頂

- 1995 インド、ヌン(7,135m)隊長
 1998 中国、ラモ・シェ(6,070m)隊長
 1999 中国、ユーイ・フェン(4374m)隊長

登攀隊長：野沢井 歩(1964.8 生) 36歳

1) 神奈川県川崎市

3) バーバリアンクラブ

- 4) 1991 ネパール、マカルー(8,463m)
 1992 インド、ヌン(7,135m)登頂
 1993 ネパール、ダウラギリ I (8,167m)登頂
 1993 アルゼンチン、アコンカグア(6,959m)登頂
 1994 ネパール、プモ・リ (7,161m)隊長・登頂
 1995 パキスタン、ディル・ゴル・ゾム(6,778m)登頂&ティリッチ・ミール(7,706m)隊長・登頂
 1995 ネパール、パルチャモ(6,187m)隊長
 1996 ネパール、チュルー南東峰(6,400m)隊長・登頂
 1997 パキスタン、ガッシャーブルム II (8,035m)&ブロード・ピーク(8,051m)
 1998 ネパール、サイパル(7,031m)隊長・登頂
 1999 パキスタン、スパンティーク(7,027m)隊長・登頂
 1999 中国、カバン(6,717m)
 1999 中国、ナムナニ(7,694m)北面初登攀
 2000 中国、ターラ・リ(6,777m)
 2000 クーラ・カンリ I (7,538m)

隊員：日南 長二郎(1955.3 生) 46歳

1) 広島市

2) 三菱電機ビルテクノサービス㈱

3) 広島勤労者山の会

- 4) 1992年夏 インド、ドウラパディ・カ・ダグ(5,500m)登頂
 1993年夏 ヨーロッパ、アルプス
 1994年夏 中国、ムスターグ・アタ(7,546m)登頂

隊員：宮川 真一(1963.3 生) 38歳

1) 神奈川県川崎市

2) 川崎市役所環境局

3) 川崎市役所山岳会

- 4) 1999 ヨーロッパ、モンブラン(4,807m)登頂、マッターホルン(4,478m)
 2000 エクアドル、コトパクス(5,897m)登頂

隊員：斎藤正朗(1971.4 生) 30歳

1) 東京都江戸川区

2) 日本技術開発㈱

4) 無し

隊員：志村真由美(1972.4 生) 29歳

1) 神奈川県川崎市

3) 山岳同人わたぐも

4) 無し

[登山史] 1985年秋、大分県山岳連盟隊(興田勝幸隊長ら13人)が南西稜から登頂をめざし、9月23日にアタックしたが、6800mで登頂を断念した。同日、トゥゴロン峰に2人が初登頂した。86年春、中国チベット登山隊(ロツェ隊長ら20人)が入山し、4月18日、南西稜6800m地点にC3を建設。28日、サンジュ、ジャブーら12人が初登頂に成功した。92年春、自衛隊山岳連盟隊(大崎直彦隊長ら6人)が入山。5月18日、日本人とチベット人各1人が登頂した。95年夏には栃木県高校体育連盟登山部(石澤好文隊長ら24人)が入山。8月11日、南西稜の6600mにC3を建設し、17日、C2から隊長ら4人が初登攀。続いて19日に5人、20日にも5人が登頂した。同年7月、福岡大学(山内一男隊長ら10人)と北京大学(張勤隊長ら10人)の合同隊が入山。8月17日、南面から菊池守ら4人が登頂。同日、中国側も登頂した。

97年夏にH A J隊(天城敏彦隊長ら13人)が栃木ルートから挑戦。8月17日6人、18日3人が登頂した。98年夏にもH A J隊(関根幸次隊長ら10人)が入山。新ルートの西稜から8月15日3人が初登攀に成功した。99年にも奥田仁一ら3人が栃木ルートに入山。5月30日に3人が登頂した。

事務局日誌 (5月)

- 3日(木)～6日(日) ニンチン・カンサ隊、
ヤンラ・カンリ隊合宿(於、富士山)
- 9日(水) ヒマラヤ355号発送
- 10日(木) 藤田弘基出版記念会(於、新宿、遠藤、山森、八木原、尾形、岩崎、中川、野沢井)
- 13日(日) 栃木県南地区協議会ガッシャーブルムⅡ登山隊壮行会(於、栃木市、山森、岩崎、中川)
- 17日(木) ヤンラ・カンリ隊、安藤斎隊員から胆石のため参加取消し連絡入る。
- 18日(金) 合同家族会/壮行会案内を各隊員へ
- 19日(土) HAJ理事会(山森、八木原、尾形、岩崎、中川、野沢井。遠藤顧問、酒井会長、保坂監事)
HAJ総会(於、かんばヘルスプラザ東京 本人出席15名、委任状262名)
- 20日(月) 登山用スノーバー製作(於、近喰組、

山森、田村、宮崎、守山安次、岩崎、中川、野沢井、宮川真一)

- 26日(土)～27日(日) ニンチン・カンサ隊合宿(於、HAJルーム)
- 27日(日) 文部科学者登山研修所友の会研究会(於、信濃大町市、山森)
同上前研修所々長柳沢昭夫氏退官を労う会(於、松本市、酒井、山森)
- 28日(月) 東京集会(12名)

ヒマラヤ No.356 (7月号)

平成13年6月10日印刷 13年7月1日発行

発行人 山森欣一

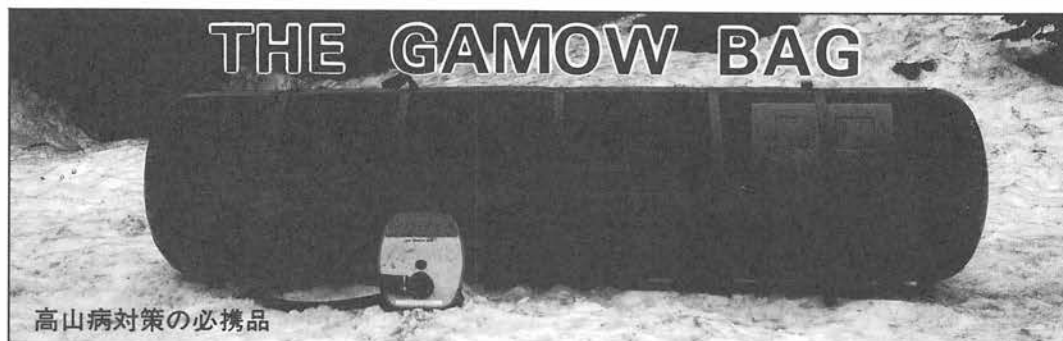
編集人 山森欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



高山病対策の必需品

ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)

●パルスオキシメーター

(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遥かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・
現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・
中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆

キャラバンデスク

(東京) ☎03(3237)8384 (直通)

(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のバイオニア ■本

社/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1

岩波書店アネックス5F

☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396



**株式
会社**

西遊旅行

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■大阪営業所/〒530-0026

大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F

☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル
(通話料無料)をご利用下さい。

☎0120-811395

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カメラ本店／〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店／〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店／〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館／〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店／〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店／〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店／〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店／〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店／〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブラーカ店／〒950 新潟県新潟市天神1-1 プラカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店／〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店／〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店／〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店／〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店／〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店／〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店／〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所／〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004